

豊臣秀吉が持久戦でこれを落としたのは、一にかかつて輸送力にある。

そういう意味においても貴重な二四時間の経験だった。

青春の記録

山口県 井上文夫

昭和十七年三月、山口県師範学校を卒業して小学校に赴任、一年足らずの勤務で、現役兵として山口の四十二連隊に入営したのが昭和十八年二月一日であった。

間もなく独立歩兵第五大隊に転属命令が下り、山海関經由で当時の中華民国浙江省杭州に着いたのが二月二十一日であった。いよいよ本業基本教育を受けながら浙東地区の警備及び戦闘に参加することになったのである。

昭和十八年十月十日、甲種幹部候補生を命じられ、十九年一月六日、保定幹部候補生隊に分遣の命下り、一月十五日に北支保定の予備士官学校に到着、極寒の地において大東亜戦役の支那方面勤務についた。

昭和十九年八月二十一日、教育終了、兵科見習士官を命じられ、杭州の原隊に復帰した。この間、私も幾度か戦争に参加し負傷して野戦病院に入院したこともあるが、原隊にいた同年兵の幾人かが戦死したことも聞き、後に続く覚悟を新たにしたのであった。

そして間もなく次のような作戦命令を受けた。

(軍事極秘)

歩六一旅作命乙第一〇六号

歩兵第六十一旅団命令

十月二十八日 〇七〇〇

杭州

一、師団工兵隊ハ製材班(移動製材器ヲ附ス)ヲ編成シ寧波ニ派遣ス

二、旅団ハ前項製材班ノ杭州―寧波間ノ輸送ヲ実施セントス

三、井上見習士官ハ第二項製材班ノ人間器材ヲ十月三十一日杭州発ノ連絡自動車ニ依リ寧波ニ輸送スベシ

歩兵第六十一旅団長 西脇宗吉

下違法 印刷交付

この命令に従って早速輸送のための計画に入り、輜重隊の幹部とともに輸送の所要時間を含めた次の工程表を作成した。

昭和十九年十月三十一日、器材を積んだ輜重車(トラック)四台と、兵員五名及び運転兵八人が私の指揮下に入り、私の部下一個小隊は分隊ごとに四台の車に乗り込み人員点呼も終わり出発準備完了。途中特に敷設地雷人と敵襲に警戒するよう指示し、計画通り七時五〇分、車間距離一〇〇呎をとり杭州を出発した。

百官を通過して約三〇分たった一七時前、私の直前の第二車両が停止した。第三両目の運転席にいた私は地雷の爆発もないのにと不審に思いつつ車外に飛び出して驚いた。道路左側の幅約五呎のクリークに四輪を上に向けて車が仰向けに倒れているではないか。

その時、第二分隊長が駆け寄って第一分隊の車両の転覆を報告した。地雷敷設の疑いがある路面を避けようとして、雨上がりのゆるんだ路肩に車輪をとられたのである。

直ちに前後左右に四人の警戒兵を立て、全員で救助に当たろう命じた。

深さ約一呎のクリークに全員入り、一挙に車体を横倒しにした。その瞬間、第一分隊の兵士はさぶ濡れ姿で這い出してきた。しかし一人の兵がなお車体の下にいることが分かり、さらに全力で押し返し直立の形に車を起こし全員無事救出できた。

企図を秘匿するために車にシートを覆っていたことが、クリークに投げ出されるのを防ぐ結果になったのは幸せであった。

それにしても救出まで本当に瞬間的出来事で、協力の偉大さに驚き一安心したのも束の間、立哨兵の「敵襲」の声とともにチェコ機関銃の銃声が響いてきた。進行方向右側の道路の向う約三〇〇呎の小高い丘からの襲撃である。

直ちに道路を遮蔽に散開し応戦態勢に入った。もちろん命令遂行のためには強行突破すべきだが、このままでは乗車もできない。至近距離にある五、六十人と思える敵に対し、直ちに第四分隊の擲弾筒四筒に、各筒二発の

発射を命じた。擲弾筒の威力はすさまじく、死傷のほどは分からないが、怯んで散ってゆく敵を確認して、急遽乗車出發を命じた。

しかし残念なことには、この間、歩哨一人が敵弾に倒れ間もなく息を引きとった。そして第一車両と積載の器材は放棄せざるを得なかった。

興奮と慚愧の念を抱いて、予定時間を約四〇分遅れて暮れた寧波の旅団本部に到着、駐屯部隊に兵の休息を依頼し、私は西脇旅団長に報告に赴いた。

「ご苦労であった。しかし兵を失ったことは残念」とだけ言われ、車や器材のことには触れられなかった。私の悲しい一日の任務は終わった。

戦争体験記

徳島県 内田 善一

私は、昭和十七年七月十日一枚の召集令状で家族に別れを告げて歩兵部隊に入営した。一か月の歩兵の教育を

受け、八月から衛生兵の教育を三か月で終えて、十一月には中国大陸へ渡った。揚子江を遡り武昌港に上陸し、師団本部や野戦病院の駐在する感寧で外科病棟に勤務することとなり、戦地での初めての正月を迎えました。

正月を喜ぶ間もなく空襲を受け、患者、衛生兵、病院勤務の地元民等二十数人の尊い生命を失い、その光景を目のあたりに見、戦争の悲惨さを感じ、自分の身を守るのは自分のみだという思いを深くしました。

十八年四月、部隊移動で洞庭湖を渡り、華容という町に野戦病院を開設。私はそこから約二〇^キ前線の石首という集落に設けられた第一線の患者収容所で勤務することとなり、軍医以下二〇人くらいで前線から運ばれる負傷兵の応急処置にあたった。

負傷兵は追撃砲弾を受けて顔の半面がない者、片手片足のない者、腹部の表皮がなく内臓がはみ出している者等、その残酷さは書き現わしようがない。負傷兵が次から次と運ばれてくるので、衛生兵の手が足らず、不眠不休で処置しても一日一回のガーゼ交換が精一杯だった。

そのころは七月の暑い最中なので、傷口から二^テく、ら